2019年(平成31年)1月30日(水曜日)　日本農業新聞

きょう歩き

協同へ導く寄付講座

働く意味求める若者

農的社会デザイン研究所代表
蔦谷栄一氏

企業による大学への寄付講座はずいぶんと広がってきた。企業だけでなく、協同組合系統も寄付講座に力を入れてきている。こうした中で特に注目しておきたいのが、日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会による「ワーカーズコープ論」による寄付講座である。

2015年の沖縄大学を皮切りに、その後、沖縄国際大学、久留米大学、沖縄キリスト教学院大学、千葉大学、福島大学、和歌山大学、桃山学院大学、琉球大学と9大学に広がり、新年度は埼玉大学、新潟大学でも講座が開設される見込みだという。

講座が急速に広がっていることにも関係するが、この「ワーカーズコープ論」に対する学生を含む大学側からのニーズが極めて強いということでもある。協同組合系統による講座の詳細について把握してはいないが、ほとんどは協同組合運動や組織についての理解を求める講義方式であると推測される。これに対して「ワーカーズコープ論」は、講義方式は一部で、現場実習やディスカッションに時間を重点的に配分しているところに特徴がある。講座が終了しての学生や教員の反応を見ると、講座に触発されるところは極めて大きいように受け止められる。

ワーカーズコープは、ご存じの方も多いと思われるが、協同労働の組合であり、働き手が出資者になり、一人一人が経営も労働も担う働き方の形である。目下、政府によって働き方改革が推し進められている。賃金水準や就業時間などの見直しも重要ではあるが、今、学生、若者たちが一番求めているのは働くことの意味・意義を見いだすところにある。多くの学生は「株式会社とは違う原理を持っている会社で働きたい」「働くことをまちづくりに生かしたい」などの意向を持つようだ。

「ワーカーズコープ論」では、「大半の学生がアルバイトをしている現状を前提に、学生時代から地元や大学の存在する地域でワーカーズコープを立ち上げ、仕事おこし、まちづくりを学び、協同収入を得ること」をいかに実現していくか、実践的なアプローチを試みる。

今、協同組合、農協の在り方が問われているが、協同労働や「ワーカーズコープ論」の切り口・運営に学ぶべきことは多い。

（次回は2月6日付）